

## 十八世紀の在村知識人の思想形成

——奥貫友山の遺書を中心として——

### はじめに

十八世紀半ば、宝暦・天明期は近世を二分し、近代に至る歴史過程の直接の起点（幕藩体制解体の起点）として位置づけられてきた<sup>1)</sup>。本稿が扱う武蔵国入間郡久下戸村（現在の埼玉県川越市）の奥貫友山（一七〇八—一七八七）は、当該時期を生きた在村知識人である。奥貫友山は、この時代を生き抜いていくなかで、何を見、何を考えたのか。友山の思想形成の過程を丹念に追跡することにより、時代や社会のなかでの友山の葛藤の実像に迫っていききたい。本稿の課題である。なお、筆者の関心を述べておけば、十八世紀半ばは、明治期の民衆の知的土

壌——新聞・出版物を積極的に受容していくような——が醸成されはじめる時期だという見通しを持っている。すなわち、そうした側面でも当該時期が起点となったのはないかという問題意識を持つている。

研究史上、友山は儒者・慈善家<sup>2)</sup>としても知られている。近年では、白井哲哉氏が友山の持つ武士と農民の間にある「中間性」を、「治者」と「家」に対する意識と行動から分析している。白井氏は、最終的に「農民の家」へと「回帰」する友山の姿に「十八世紀の中間層の意識の『中間』性と限界」を指摘している<sup>3)</sup>。また、明和の伝馬騒動について奥貫家を事例として検証した、根岸章子氏の研究もある<sup>4)</sup>。本稿では、こうした先行研究に学びながら、友山が書き残した遺書を経年で検討することによ

鈴木 愛

って、友山の思想がどのように変化していったのか、考察していきたい。後にも述べるが、友山は十代半ばに江戸に遊学している。そのときの師は幕府の儒者、成島錦江であり、友山は生涯を通じ錦江と交流している。錦江の周辺には、荻生徂徠の高弟服部南郭がおり、また、八代将軍吉宗に『民間省要』を献呈した田中丘隅もいる。また、友山は、細井平洲や西沢曠野、足利学校第十六代座主の月江元澄といった人物とも書簡のやりとりをしている。<sup>5)</sup> 友山の思想形成過程の解明は、友山の個人史を叙述するだけにとどまらない、大きな広がりを持つている可能性があるのである。

なお、本稿で使う在村知識人という呼称は、川村肇氏の『在村知識人の儒学』や杉仁氏の『近世の地域と在村文化』といった研究を踏まえている。川村氏は「日本の教育の近代化の前提条件と質とは何であったのか」とい

う大きなテーマのもと、近世日本教育史を在村知識人の儒学知とその性質から分析し考察されている。<sup>6)</sup> 杉氏は、これらの知識人たちの「風雅」に関するネットワークの分析から、交流の状況を中心に考察されている。<sup>7)</sup>

## 一 奥貫友山の生涯

奥貫友山が居住した武蔵野国久下戸村は、荒川と新河岸川に挟まれた入間郡に位置する。村内には川越城下から新座郡へ通じる街道が通り、川越まで一里半、日本橋まで九里半、八王子まで八里の距離にあった。近世を通じて川越藩領に属している。

村の組織は村明細帳を見る限り、元禄七(一六九四)年ごろから「久下戸本村分」「久下戸新田分」の二つに分かれていた。時代が下るにつれて「上組」「下組」という区

書状※年号不明で月日のみ記されているものがほとんど。

■「詩解二付書状」○東都菊池忠充より■(2.14)「土地売買二付書状」○黒須平治より■(8.22/8.23/9.8)「本郷源次郎、理左衛門一件二付書状」■(正.27)「年賀状」○高山主税之助より■学問等二付返答書状(卷子装)○成島道筑■「成島道筑書状」○鳴鳳脚(道筑)より■(9.24)「大納言様 論語講釈等二付書状」○成島道筑より■(11.3)石碑建立等二付書状○鳴鳳脚(道筑)より■(9.14)「平洲塾長の件二付書状」(卷子装)○西沢万次より■(3.25)「金子請取二付書状」○平岡左衛門

【奥貫友山略年譜】

西暦	年号	月日	年齢	事歴	友山執筆記録		
						成島錦江関連事項 (1689-1760) ◆年号の特定できていない著述 「処世往来」「成島考 平準書」 「成島考 佩緩」「成島考」 「三世の花」 ※このほか、和歌に関する書、多数。	
1708	宝永5		1	武蔵国入間郡久下戸村名主 奥貫正清の長男として出生。幼名小平太。			
				■学問素読を不老牛山和尚に習う。 ■江戸に出て幕府の儒官成島錦江に儒学を学ぶ。		<嘉永6年刊行> 「子姪禁俳諧書」 ①表紙見返しに「安中板倉氏開雕」 ②「國書總目録 補訂版」(岩波書店 1989-1991)の参考項目書名: 子姪に俳諧を禁ずるのふみ、子姪に俳諧をいましむるふみ。 (「甘雨亭叢書別集」) 一安中藩主の板倉勝明が未刊行の論を集めたもの。  ※この頃(1711年頃)田中丘陽が錦江の元で歴史、経書をなどを学ぶ。 「民間省要」は道筑を介して吉宗の目にとまった。	
1720	享保5~12年迄						
1723	享保8	5.24	16	祖父 奥貫正信(70)死去。	「懐中鏡」		
1724	享保9	10.3	17	仙波村の須田氏の女、夕と婚約。 祖母 死去。			
1725	享保10		18	夕と結婚。			
1727	享保12	7.21	20	長女 加禰 誕生。 洪水。			「大水記」
1728	享保13	8.2	21	洪水。 次女 誕生。(名前の記録、見つけれず)			「大水記」
1731	享保16		24				
1736	元文元年		29	長男 辰之助(正俊) 誕生。			
1737	元文2年		30			「遺書」	
				■次男 半次郎 誕生。			
				■三男 助三郎 誕生。※(次男、三男の出生年に関しては記録を見つけれず)			
1742	寛保2	8.1	35	関東地方大洪水。利根川・荒川・新河岸川氾濫。被災民を船で救出。自邸・寺院等に収容。救済した者の数、1万6000余人(48ヶ村)にのぼる。	「大水記」	「東方農準・農諺拾穂」 奥書以降に「此書、成島先生の著述し玉へる俊り、嘉永の今まで、一百余年を経たり…」の文面が付記され、江戸口関齊主人と署名。	
1743	寛保3	1.12	36	前年の救済の内容が川越藩の知るところとなり、父 正清が渋井村 高橋半右衛門と藩会所に出向き、御贖三把賜る。※(友山は江戸に出府中。)	「救荒餘話」		
		4.27		救済の必要性が無くなったと判断し、救済打ち切り。			
		10.4		渋井村 高橋半右衛門と共に川越藩主秋元涼朝に召される。城中にて洪水(大水)の際の善行を称えられ、自鷹の絵一幀を賜る。			
				■長女 加禰 高橋兵蔵に嫁す。			

表① 奥貫家の田畑推移

年	田地	畑地
1735	10町3反8畝24歩 分米87石8斗3合	3町3反3歩 分米21石1斗6升5合
1752	22町7反9畝9歩 分米212石9斗3合	3町1反3畝3歩 分米16石8斗7升7合 (武蔵野開) 5反2畝9歩 分米2石7斗8升7合
1775	20町6反9畝24歩 分米190石9斗3升4合	2町5反8畝14歩 分米8石6斗4升9合
1819	16町9反7畝21歩 分米155石5斗9升8合	2町2反9畝8歩 分米7石4斗8升1合

※奥貫家文書No.352/365-1/591-1/586-1を参考に作成

「友山二子不祥二付書状」○月江元澄より

■(9.7)「名座一件二付書状」○三井孫平衛より■(正.15)「年賀等二付書状」○山瀬平蔵一英より■(2.7)「新年挨拶状」○月江元澄より■(仲夏初2)「贈物礼等二付書状」○月江元澄より■(11.初2)「久下戸村立寄二付書状」○月江元澄■(11.20)「元澄弟泉首二付書状」○月江元澄■(4)「新田開発の用水二付書状」○友山より錦江先生宛■「関本故有合分進上二付書状」○万二(西沢万次のことか)より■(7.6)「旅行報告二付書状」○権太より■(12.19)「惣五郎儀二付書状」○玄寿■「道筑公神ノ口二付書状」

「友山翁一軸二大納言様 中將様御感銘二付書状」(巻)○村山七右衛門より西沢万次へ

分の呼称になり、奥貫家は上組に属していた。  
奥貫家は、久下戸村で代々名主を務めている。友山は五代目当主である。次の年譜は、奥貫家文書の諸史料から筆者が作成したものである(【奥貫友山略年譜】参照)。  
友山は宝永五(一七〇八)年に、奥貫正清(正因)の長男として生まれ、その名を正卿という。ちなみに友山とは晩年の号であるが、本稿では友山で統一する。正清も俳諧などを嗜む文人で、正清の代からは小作経営も確認できる。友山は、十代半ばに遊学し、享保十二(一七二七)年ごろから、父の跡を継いで名主を勤めた。上の表①は、奥貫家の田畑の推移を整理したものである。奥貫家の経営規模は村内第一であり、友山の代になって規模を拡大し、宝暦二(一七五二)年がピークとなり、その後、減少していく。  
友山を知るうえで最も基礎的な史料は、友山が没した

1744	延享元年	5.25	37	妻 友(36)死去。			
1745	延享2	9.27	38	国家老 高山甚五兵衛より「古六歌仙」を賜る。			
				■埼玉郡越谷 岡本氏の女 山と再婚。			
				■次女 仙波村 田村紋太郎へ嫁す。			
1749	寛延2	5.13	42	父 正清(65)死去。			
		5.2		長女 加禰(23)死去。 四男 小四郎 誕生。			
				■三女 秀 誕生。		「大師かはらの日記」 大師河原の池上氏の元に養女にいった娘を見舞いに行くまでの日記。	
1752	宝暦2	5.2	45	長男 辰之助宛に「遺書」を書く。	「遺書」		
1753	宝暦3	7.19	46	同じ日に、次男 半次郎、三男 助三郎ともに死去。			
		霜.20					
1764	宝暦4	10	47	国家老 高山甚五兵衛より「三夕和歌」を賜る。			
1756	宝暦6	10.7	49	三女 秀死去。			
1757	宝暦7	7.22	50		「遺書」に添え書き。		
1758	宝暦8		51		「宝暦八年之記」		
1760	宝暦10		53	師 成島錦江(72)死去。		「はるのふね」	
				■家督を譲った後、奥貴塾開塾。			
	宝暦13		56		「経験産事箋」 成島錦江/ 荻生正卿友山校	「経験産事箋」 成島錦江/ 荻生正卿友山校	
1764	明和元年	12	57	中仙道伝馬助郷に端を発した一揆が北武蔵の豪家名主の家の打ち毀しを行いながら人間にまで及ぶ。	「中仙道増助郷一件」		
1765	明和2	1	58	人間、川越地方に一揆が及ぶ。奥貴家のみ打ち毀しを免れる。	「酉年百姓騒動一件」		
		8.18					母 鏡(77)死去。
		11.3					弟 正悦、死去。
1768	明和5		61	川越藩主 秋元氏山形へ転封。松平氏が前橋より入府。	「河越御替記」		
1771	明和8		64		和歌集「老のすさみ」		
1777	安永6	8	70		「子孫江申し置ことは」		
1779	安永8		72		漢詩/和歌		
1780	天明元年		73				
1784	天明4	4.8	77		享保5～12年までの「懐中記」に奥書。		
1785	天明5		78		「荻氏遺書」		
1787	天明7	11.1	80	友山、死去。墓誌は成島龍洲が撰文。	辞世の句。「栖々八十 娛戲悠悠 一朝御去 満天清風」		

※『奥貴家文書目録』を基礎として、先行研究と実際の文書を元に作成。

ときに成島龍洲が撰文した墓碑銘である。墓碑には、「長嘗遊先子之門。為人篤厚好学」とある。友山が遊学した「先子」とは、龍洲の父、成島錦江である。明治末年に編まれた『譯註 先哲叢談』<sup>8)</sup>でも「友山少くして学を好み、江戸に遊びて業を成島錦江の門に受く、学成りて郷に歸り、生徒に教授す、今に至るまで相中文学の盛なるは友山より始まると云ふ」（奥貫友山）と述べ、江戸遊学が友山に決定的な影響を与えたとする。先行研究のなかで、友山を江戸で学んだ村役人、「治者」としての視点から検証したのが白井氏である。<sup>9)</sup> 白井氏は「友山と道筑を結んだ縁は不明」としながらも、服部南郭がこれ以前に川越藩に出仕していたことや、友山も江戸の赤羽根で南郭の講義を聞いているという史料<sup>10)</sup>から、南郭がその接点だったのではないかと述べている。

友山が錦江から何を学んだのかについては、これまで指摘されていない。しかし、奥貫家文書に錦江が友山に宛てて送った「学問等二付返答書状」<sup>11)</sup>が二通残されている。それは「先日草稿の拙語、附便遣上申候処、御笑納之上に、御丁寧之御書中、承知仕り候」という書き出しで始まり、続けて「学問四十年と申、三十年読書、十年

遜友切磋になり度□」と錦江は述べる。学問四十年うち三十年読書と、読書を重要視している。このほかに、錦江は次のようにも述べている。<sup>12)</sup>

歴代経学の羽翼に候て、先史漢を讀、経書に移り候哉。経書を見、基を立、歴代に移り、又立歸り、経学に還り候哉との事、一一承知仕り候。又文章の事御尋にて、無所取材候ては如何との事、是亦御尤に候。畢竟は、経学の御好と奉存候。厚き御志にて候。経学と申事は、後世の事にて、孔子の時に無之事、漢の時専門と申す事有之、科学の時経術と申而選学有之候。公孫弘以経術進の類にて候。一経に通候事には、弘は春秋にて学れ候。其時学官を立て候而、古書中正経とすへき物を以て、通一経候者、いつれも致及第候。（中略）論語礼記の書類、其目にて見しと、世間の見しとは、雪と墨に而候。中中筆紙には難申盡、重而御出候は、外之事相止、先論語斗を御極□□斗も御選□候而、御口授仕遣可申候。其上にて、野子か申入候事、大に御自覚あらば深切の事候間、自分の卑下尊攘は不仕候。呉呉御隙を見合られ、御出候□□と存候

すぐに経学を学びたいとする友山に、錦江は『史記』や『漢書』を読んだ後に『論語』を読むよう勧めている。また、『論語』や『礼記』に関しては、実際に読むことを勧め「論語礼記の書類、其目にて見しと、世間の見しとは、雪と墨に而候」と強調している。

江戸遊学から久下戸村に帰郷後、享保十二(一七二七)年、十三(一七二八)年の二度の洪水を経て、寛保二(一七四二)年に関東地方は大洪水に見舞われる。この大洪水の際に友山は『大水記』<sup>(13)</sup>を執筆している。『大水記』からは、寛保の大洪水の詳細な記録を見ることが出来るほか、奥貫家における救荒の様子や、他村や藩との関り、また巻末に書かれている『救荒余話』からは子孫に宛てた友山の教訓を見ることが出来る。

この後、友山は宝暦ごろに息子正俊(辰之助)に家督を譲っているが、その年月日は未詳である。この時期に友山・正俊父子に降りかかったのが、伝馬騒動である。これは、明和元(一七六四)年春の朝鮮人來朝に伴い、通常の十倍以上の国役金が課されたことに端を発する。たびたび洪水被害に見舞われていた久下戸村では、この国役金を負担できる状況ではなかったことから、免除を申

し入れるが受理されず、請け負わざるを得なかった。このような中、騒動が発生。終息すると奥貫正俊を含む久下戸村の村役人五人は藩から出頭を命じられ、吟味を受ける。この際、近隣の四か村で相談の上、手代に差し出した金二両について、「賄賂」であるとされ、名主である正俊は役儀放免の処罰を受けたのである。この時の友山の苦悩、苦勞は相当なものであったようで「中仙道増助郷一件」<sup>(14)</sup>や「酉年百姓騒動一件」<sup>(15)</sup>といった記録を残している。

明和期には私塾の経営も開始した。その開始期はわからないが、墓碑に「常以教導子弟為娛、故郷里人民和順、蓋友山之為也云」と刻まれているように、周辺地域の子弟教育に務めたことがわかつている。

さて、友山は、その生涯を通していくつもの著述を書き残している。主なものは年譜に記したとおりだが、このほかに帳簿類や覚書、和歌、細かいメモ類などをあわせるとかかなりの数にのぼる。この中で、本稿で着目したのは、友山の遺書である。友山は、なんと生涯にわたって、現存しているだけでも四通もの遺書を書いている。早いものは元文二(一七三七)年三十歳、最後の遺書は没

する二年前の天明五（一七八五）年七十八歳に書いてある。四通の遺書を時系列的な軸とし、その内容を分析することで見えてくる、思想の変遷を見ていきたい。

## 二 遺書の分析 I

### 1 元文二年の遺書

最初の遺書は、元文二（一七三七）年に両親に宛てて書かれている。このとき友山は三十歳で、前年には長男・辰之助が誕生している。また、小さな洪水は何度か経験しているものの、奥貫家の経営状況は、宝暦期のピークに向かつて伸びている時期である。

一、不孝子今日達慈親隔書明善明之哀情遺不孝煩死後候、伏てねかわしくハ見□之たいニ御応可被下候事は左ニ相記候

一、辰之助□嫡子無頼之行有之不可保一□候ハ、以來、可立嫡子候辰之介田園不可過五十石候

一、おき、おめくり以各五十両之黄可嫁但婿家ハ五十石耕耘ヲめ□れ候ほと二而事足ルへく候

拙者存生之曰学問御意ニ入り不申様ニ相見へ候此段者

一、拙者行跡不宜学問之功不相見なと奉存候、是ハ拙者未熟之科ニ而候、学問之罪ニ而者無御座候家を起シ候事ハ古今皆学業之所教ニ候、一ハ児孫学者出来候様ニ相下ニ相願申候、此念継候様ニ児孫へ申伝へ度奉存候、以上

元文貳年丁巳七月廿七日

奥貫小平太 正卿

慈父母尊

高山八藏殿其外四人之衆中へ深恩御礼申上度候以上、急ニ旅立何事も早々ニ申渡候、

児孫仕官之念有之候者ハ右之衆中へ相談可申候<sup>(16)</sup>

この時期に、友山がどこかに旅に出たということは史料上明らかではないが、添え書き部分を見ると自分が立つた後のことを両親に託していることが分かる。

最後の条では友山の「学問」について両親が気に入らないと思つていることに對し、自分の未熟さによるもの



であつて学問の科ではないと弁明している。また、続く部分では、自分がいなくなつた後も子孫に学問を続けさせ「学者」になるように、また、その友山の思いを子孫に申し伝えて欲しいということが書かれている。また、添え書き部分の三行は「兎孫仕官之念有之候者ハ右之衆中へ相談可申候」と述べ、子孫に「仕官之念」があるときは、高山八蔵ら四人に頼るようというアドバイスを残している。高山八蔵とは、川越藩の年寄役で奥貫家と兼ねてから親交のあつた高山甚五兵衛のことであると考えられる。

## 2 宝暦二年の遺書と宝暦七年の添え書き

次に友山が遺書を残すのは、十年後の宝暦二（一七五二）年のことである。この間、寛保二（一七四二）年に久下戸村が大洪水に襲われ、友山と父の正因が大規模な救荒活動を行ったことが史料に残されている。

宝暦二年の遺書は埼玉県立文書館に収蔵されている奥貫家文書の中にはなく、<sup>(7)</sup> その全文は佐藤繁氏の『奥貫友山』の中に写真とともに見ることができている。この遺書は、

当時十六歳になつていた長男の辰之助宛である。しかしこの時期、友山が病氣になつた、あるいは藩等から何らかの咎めを受ける可能性があつたなどの遺書を書き残す動機となるような背景はわかつていない。この遺書の冒頭部分には「遺書 宝暦二年申五月 相記」とかかれており、前半部分には借金とその明細が記されている。それを表にしたのが、表②である（次頁）。

この表を見ると、奥貫家の借金が宝暦二年以前に二百五十両以上あつたこと、またこの前年の米価値下がりで、やむを得ず百二十両余の借金をしなくてはならなくなつたことが読み取れる。また「村方連判金」や「村弁」という記述からは、奥貫家が、村を代表して、名主として借り入れなければならなかつたこともわかる。この年の奥貫家の持高は近世を通じて、ピークとなる<sup>(8)</sup>。しかし、三百両以上の借金を背負つていたということは、十年前の寛保の大洪水の際の救荒で財をなげうつたことを念頭に入れたとしても、名主としての負担が相当あつたと推定できる。遺書の文中にも「家内切り詰め相暮らし」という一文があることから当時の奥貫家は、余裕のある状況ではなかつたことが窺える。

表② 宝暦二年の遺書にみる奥貴家の借金

借金	借用相手	利息	その他
金百六両	平蔵※1	壹割 但し去る未年迄利足済	高六拾両之内残り四拾九両八村方連判金
金拾両二百余	平蔵	村弁※2 但し去る暮より借用也	
金六十両	泉勝寺隠居	壹割 去暮迄利足済 内拾両は去年より借用無証文	
金五拾両	見徳院様より借用	壹割 利足去暮迄済まし来る	
金五拾両	久保田権兵衛様	壹割半 去る暮より借用	口入権兵衛
金五拾両	泰安寺様	壹割半	口入最勝院法印 高七拾五両の内残り三十両武衛門※3、但し 金主へは其の沙汰に及ばざる也
金四拾五両		壹割	
金五両			下村溝金此の内へ遣わす
合計とその内訳に関して			
合三百七拾六両貳分 式壹五拾六両は前々より借金			
内百廿両貳分は去未暮米価値下直に付き米かこいの為に借用。然る所、当夏迄米価下直、是非なく候。尚暮の米早々相払い、右の百廿両貳分は相済まし式百五拾六両の所、家内切り詰め相暮らし時節見合わせ相払うべく、此の差略甚蔵殿と相頼むべし。			
外に廿五両高安金預かり 内 拾両玄庵より証文これあり。拾五両孫平次り同断。利足三両宛去る未迄済ます。			

※1長女の嫁ぎ先、高橋平蔵のこと。

※2村全体で弁済すること。

※3友山の弟

(宝暦二年の遺書前半部分をもとに作成)

この遺書の後半部分には、弟正悦に対する財産分与や、家の経営の仕方に関しての指示等が書かれて

いる。条目としては、全部で九つあり、その内容は以下の通りである(便宜上、各箇条に1〜9の番号を付した)。

一、<sup>1</sup>弟共形付け候儀、辰之助心次第たるべし。但し、借金済み申さざる内は延引すべく、併せて物入りなしに望み候者これあらば格別たるべし。只、兄は慈悲を用ひ、弟は愛敬を専一として相斗るべく、半次郎、助三郎、小四郎と次第落ちに物入り、減少すべし。

二、<sup>2</sup>おもよ事其の方共生育よろしく仕方に候念項に致すへき也。借金済み候わば、女老人相添え、外宅も然るべき歟。おもよ望み次第たるべし。左も相斗い候節は両人の衣類、飯米、諸賄の外金式一三兩の小遣いにて然るへき歟。借金済み申さざる内は一所に罷りあり、共々出精之有へき歟。時の宜しきに随うへき也。

三、<sup>3</sup>紋太郎妻儀は此方借金済み申さざる内は、離縁或は公辺より御引渡し儀は、格別如何様なる儀

申し候とも構ひ申すまじく候。此の方の借金も形付き安堵これある節は、時の宜しきに随ひ相救うべく、それとても老人扶持に金子壺一式兩宛も年々に見助け候様なる儀にて能く候。身上安堵致させ候やうなる儀は紋太郎に添い候内は相叶わざる事に候。此の方より財物皆やり候てもたまる物に非候。

<sup>4</sup>一、武衛門へ加増地年限次第相渡すべく候。並木之分は小中居にて書分けの反別程相渡すべく候。並木を売り候儀老反式兩懸け位に候。小中居も其の位の値段に候。男畠書分け程下のもよりにこれあるまじく候。渋井分にてなりとも相渡すべく候。

<sup>5</sup>一、武衛門は、正因様愛子にて候えは念頃に致し遣すべく候。我等致し来たり候通りに心得へし。

<sup>6</sup>一、甚蔵殿へ申し候。辰之助、武衛門事頼み入り候。伯母事兼て御意を得候通り、御心得頼入り候。

<sup>7</sup>一、学問は無用なる様に候えども、必ず人の第一の先務に候。三人共に相務むべく候。

必ずゆるかせに仕るまじく候。我等生涯この道に寄り大益を得候事度々に候。まして実学実地を踐

み候人は日々の大益はかるへからず。

(宝曆七年の添え書き)

宝曆七年家難大変人道にはづれ候仕合御懇意に恥ぢまじく候仕合故御名を語

墨で塗りつぶし

此の四人我等存生の内兄弟同意の御誼に候。併せて其の方儀は民の場にすわり候て、馴れけがし申さざる様に対し相務むべく候。尤も此の段、申し置き候と申し上げべく候。道筑先生へ是れ亦右の通り相心得べく候。

<sup>8</sup>一、子供形付け官路へは堅く無用に候。平日の交わりも民家より害甚多く候間、無用たるへし。

<sup>9</sup>一、借金済み兼ね候わば見惜しみなく、田地相払い相済まし式百高にも取りしめ、子孫永代に榮え候事然るべく候。力を計らず見惜しみをいたし候わば取らぬ様に相成るべく候。金子出入帳にて我等家事取計らい候。已来天災の来り候事を相勘

り、盛衰自然の理を弁じ、時宜に随え、小崇に成りとも取べ児孫の安堵を計り候事上計に候。不佞にして生涯人倫の変に会い候事比類なる事に候。皆始めを慎まざるより起こり候災に候。必ず五倫の間相慎むべきなり。

宝曆二年申五月廿三日 之を記す 奥貫五平治正

卿 手書

凶年飢饉には父兄たのもしはなしとや。人情の常尤もなる事なり。我等生涯不幸故家次第に貧乏、敗軍の将を断じ候ても皆言訳になり、人用いざる如くに何事も不身上に成り行くに付き、妻子も冷笑いたす様にて遺言などと申し候ても、ろくろく見るところも参らざる故、書捨てる心にて相認め候えども、なんてう人は恋しかるへき時もあらんと諫言候。付してやり捨てるなり。

宝曆七年丑七月廿二日 友山五十歳 春

第七条の後と末尾の傍線部は、宝曆七（一七五七）年

に添書きされた部分である。遺書の最初から見ていくと、遺書的一条目と二条目では、辰之助の三人の弟たちの結婚に関して、また、友山の親類に当たると考えられる「おもよ」<sup>(19)</sup>の身の振り方に関しての記述がなされている。ここで友山は二度に渡つて「借金済み申さざる内は」と述べ、家の借金の状況に気をつけるよう強調している。

三条目では「紋太郎妻儀」、すなわち江戸の田所家に嫁いだ二女<sup>(20)</sup>に関して述べている。ここでも、「借金済み申さざる内は、離縁或は公辺より御引渡し儀は、格別如何様なる儀申し候とも構ひ申すまじく候」と述べ、家の借金が片付かない間は、どんなことがあつても、離縁等の申し出に応じないようとしている。また「身上安堵致させ候やうなる儀は紋太郎に添い候内は相叶わざる事に候。此の方より財物皆やり候てもたまる物に非候」とも述べて、紋太郎の妻である間は、「身上安堵」はできないとしている。これは、この遺書の八条目で「子供形付け官路へは堅く無用に候。平日の交わりも民家より害甚多く候間、無用たるへし」として、子供たちを「官路」、武家と結婚させることに關して、日常的な付き合ひにおいて負担が多いことを理由に禁じていることにも繋がる。

また七条目で「学問」に関して「第一の先務」と述べ、元文二年の遺書と同様、奨励している。続く部分でも、「我等生涯この道に寄り大益を得候事度々に候。まして実学実地を践み候人は日々の大益はかるへからず」として、学問がいかにも有益なものかに言及している。

最後の九条では借金が片付かないようであれば、田地を売り払つても完済するようにと書き記している。「已来天災の来り候事を相勘り、盛衰自然の理を弁じ、時宜に随え、小崇に成りとも取ゞ児孫の安堵を計り候事上計に候」という一文で、寛保の大洪水の経験から、天災とその対策に関して戒めている。

次に、宝暦七年の添書きに関して考察を行いたい。このとき、友山は五十歳である。添書きされている部分は二か所の一つは、学問に関する五条目の後、もう一つは友山の署名の後に書き足されている。宝暦二年から七年までの間の五年間には、次男、三男が同日に死亡、宝暦六年には、まだ幼い三女の秀が亡くなるなど、三人の子供を短期間で亡くすという悲劇が友山を襲った。

添書き部分は「宝暦七年家難大変人道にはづれ候」という一文で始まっており、宝暦七年に奥貫家で大変な出

来事があったことがわかる。この出来事の内容に関して、奥貫家文書の中から知ることはできなかったが、「人道にはづれ候」という記述は尋常ではない。この添書き部分には一か所、墨で黒く塗りつぶしてある部分があり、解説不能となっている。塗りつぶしのが友山自身であるのか、あるいは後世の人物であるのかは不明であるが、その後の「此の四人」という文の流れからして名前が入っていたものと考えられる。また、その次の「其の方儀は民の場にすわり候て馴れけがし申さざる様に御誼に對し相勤むべく候」とかれており、長男・正俊(辰之助)に對し、「民の場」つまり名主としての在り方に関して、指摘しているのではないかと考えられる。また、道筑先生(成島錦江)の名前が挙げられており、大難に對処するときに錦江の学問・教えが有効であるという確信を友山が持っていることを確認することができる。

最後の添書き部分は「我等生涯不幸故家次第に貧乏」「妻子も冷笑いたす」等の自嘲を含んだ文章となっており、「書捨てる」と述べて、遺書が読まれないことも念頭に入れた上で遺言を残しているとも考えられる。

以上、二通の遺書と添え書きからわかることを整理し

ておきたい。まず学問について。元文二年には両親に宛てて、子孫に学問を続けさせるように、また子孫を「学者」にしたいとする旨を記し、宝暦年間においても学問を「第一の先務」としている。学問への信頼については一貫しており変わっていないといえよう。それに対し、仕官については、元文の段階では「仕官」を勧める発言をしているのに対し、宝暦の段階では「仕官」についての言及はない。むしろ逆に、子供たちの結婚相手として「官路」は避けるようにと述べている。「官」、つまり武士との交流や繋がりを避ける述べていることは注目に値する。

### 三 遺書の分析 II

#### 1 安永六年の遺書

宝暦七年の添書きから二十年後、安永六(一七七七)年と天明五(一七八五)年に友山は子孫に宛てた二通の遺書を書き残している。家督を継いで名主役を務めていた正俊が、藩への「賄賂」を理由に役儀放免の処罰を受けた、

明和の伝馬騒動(明和元年)などを経て、最晩年の友山の遺言とはどのようなものであったのだろうか。

友山は安永六年に『子孫江申置ことは』<sup>(21)</sup>を、天明五年に『荻氏遺書』<sup>(22)</sup>を書き残している。この二通の遺書に共通しているのは、友山が「学ぶべきである」あるいは「読むべきである」とする書名が、その「場所」(本家のどこにある、など物理的な場所)を含めて明記されていることである。

『子孫江申置ことは』は奥貫家文書の中に二点存在する。A4版より一回り大きな冊子と一回り小さな冊子の二冊である。中身を見てみると、字体こそ多少異なるものの、改行・改頁に至るまで正確に複写されている。一冊には友山の押印があり、もう一冊は無印であることから、一つは正本であり、もう一つは副本であると考えられる(後に分家用に書き写されたものである可能性もある)。この遺書の最後の一文に「宗五郎、淺之助、中よく□の力にもなれかしと、おもふはかり也」とあり、この遺書が長男・正俊の息子である宗五郎と淺之助に宛てて書かれたことが分かる。

佛老諸子百家其節まちくなれとも、人と生れて、

先人の道学なんそいみしかるへき。人の道は聖人の教玉ふ君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・此五倫の道なり。委しき事は、聖人の書にむかひて知へし。聖人の道を学んとならば、孝経・四書・小学・近思録をそよみすべし。龜讀終らは貝原信篤の著述五條訓を熟読し、五條の名目を明かにし、孝経・小学・四書近思録の示蒙句解を讀へし。本文の意大概知るゝなり。是を生涯に用て、五倫の道を行はんに憾なかるへし。

本書の意、示蒙にては盡へからずといへとも、家職有者は、徐力なくして力はからず、本註へ懸侍れば、右の書に一通りも手をとをす事難く、終に生涯の費用を失事あり。我こりし所なり。聖人の道は老佛高上の道と違ひ、我父に孝し、我子をめくむ眼前平坦の道にして、示蒙にて明なり。其上の徐力あらは、本註にむかひ、諸賢の見解をも見侍れば、盒意味深長なることを辨めてたかるへし。

五経は四書よりも上、古の書にして、したしく聖人心法の跡見つへし。人として是を讀さらむは、實山に手を□しくす恨あり。しかりと雖、本業有者、向

上の学にすゝむ時は、駸駸として諸生の学になりて、家事にうとく、貧乏の家となり、志を行ふ事を得ず。羊を失ふのわさはひにいたるへし。依之、予人に向上の学をすゝめ侍らす。家産にさはりなからむ人、五経にもさかのほらむ事、何かはくるしかるへき。人はたゞ人倫の急務を心懸へし。人倫の道おろそかにして、我も亡、人にもうきめを見するぞかし。おそれてもおそるべし。

天性人倫に厚き人も、學術なければ、或は人の誹謗に驚き、人情の偏なる所より、人倫の道に害有。孔子善人をとり玉はさる所也。勤て学へし。

詩歌の事不論是非、不好へし。真学に甚害あり。況や我才を示さんとして、却て罵辱を得る也。今世の人、他の詩歌をみては、其志す所を見ずして、言句の非、毛を吹て求一座の笑具とす。浅まし世や。

若風雅に志し、深くつゝむ事を得さらむには、詩は唐詩選を、忠により熟讀し、白氏文集の心を心として作るへし。心性を述るに足也。世の流行にしたかひ、唐明の人の心を心として作らは、一生唐明を模寫するのみにして、我心性を作り出すことはなかる

べし。白氏文集は、今世の人の叱唾する所、其意味を辨されは也。(中略)

士民は常に仁義のさたを聞ず。人の仁心あるを悦び、いひもてはやせとも、己人を恵む事をはするに吝也。義心は地を□なき物なれば、村里の申し合事、決して無用也。上へ願事あらんも一人立事はかくへつ、人と組合たる事は一向無用なり。恐れ慎むへし。

(中略)

若年の時はキ、者也、□□也といはるゝを嬉しくおもふ物也。友山此まよひありしゆへ、生涯の心得違度度あり。

吾書を讀、家業にうとく、一生を失へり。若海専蔵の所行を手本とすへし。

人を恵も、力を量されは□の本也。戊の大水に飢人を救し事、吾生涯の誤也。家貧しくなりて、妻子も恨、顔も立かたく、うめきを見たりき。凶年飢歲には子弟□なしと。孟子に見へたり。上古人情かくの如し。いはむや、くだれる世をや。貧なれとも不恨、唯孝養の足ざるを憂るは、古の道也。今時の子弟に對して、何ぞ此美事を望ん。

世の中のうきもつらきも今そしる

身のおこたりのむくゑなりとは

道にそむき、身の勤をせざるをおこたりとは云也。勤儉・慈悲・正直は人の世に立基なり。有徳公の御と孝子数人撰□あり。皆極貧の人也。今も古道に叶へる人もありし。(中略)

正路は損なるやうなれども、終は身を立る也。企公訴に理をたのむへからず。罪にも□し人あまた見たり。理たのみかたし。しからは公訴は、決してさせる事と安心すへし。内内にて不足し、公訴させるぞ、するにまされり。

仕官は勿論、公義並地頭所へ懸る家職、一向望むへからず。尾を泥中に曳こそ、龜の萬歳をたもつ基本也。士民は賤し、いやしければ安し。士大夫は貴し、貴は危し。其吉凶掌上に見るへし。

仏法の事大概に心得て有ぬへし。禪家の書は少室六問集・傳心法要・天台家の書は、小止□・各一冊つゝ有。熟読すへし。(中略)

老子の道は、老子経大義とて、二冊有。甚見安し。儒仏道の三つは、日月星の天にかゝるか如、人皆仰



望する所なれば、人としては、其大かいは辨知す  
へし。扱身をよする所は、儒道なるへし。儒の□□  
□□□仁義も用やうにて、身を損する也。老子は身  
をたもつの至實なり。□味すへし。くたれる世は、  
甚以仁義行かたし。老子は季世の備也。

今の世をみるに諸侯より乱るゝ事はなかるへし。す  
ゑの世になり、権現様御徳うするく事あらは、百姓  
よりみたるへし。さやうなる時、魁首とならぬやう  
に心かけ、はやくいかならん山林へも隠れ住、みつ  
から耕作して、命を全すへし。常に農業になれされ  
はさやうの時難義也。常常自農具取、身をならはす  
へし。□術なと心懸るもよし。治乱にかゝらず、人  
としては、自分に身妻子を養心懸なきは、危事也。  
先祖の土地にすわり、先祖の家に風雨を凌、うか  
く、と日を送る事、いかんそや。此農にはなれ、此  
家を出なは、腕の無き乞食也。身一つは吾身にてし  
まふやうに心懸へし。第一のたしなみ也。  
酒色賭博にて家を破る事は、間も有へし。一心にて  
家を破る事は忽なり。別して怒には後難を思へし。  
宗五郎、淺之助、中よく□の力にもなれかしと、お

もふばかり也。

安永六年秋八月

友山七十歳書

『子孫江申置ことは』の特徴として、これまでの遺書  
では、特段言及されてこなかった道徳観に関する記述が  
挙げられる。ただし、これまでの遺書は両親や、成人し  
た息子に対して書かれたもので、言及するまでもなかつ  
たのに対し、今回の遺書は成人前の孫に対して書かれた  
ものであるという違いは考えられる。

学問については、「孝経・四書・小学・近思録をそよ  
みすべし」という記述からも分かるように、学問の習  
得過程を事細かに指示している。また、「五経は四書より  
も上、古の書にして、したしく聖人心法の跡見つへし。  
人として是を讀さらむは、實山に手を□しくす恨あり。  
しかりと雖、本業者者、向上の学にすゝむ時は、駸駸と  
して諸生の学になりて、家事にうとく、貧乏の家となり、  
志を行ふ事を得ず」と述べ、家業をないがしろにして学  
問にふけることがないようにと戒めている。続く個所では  
「戊の大水に飢人を救し事、吾生涯の誤也。家貧しく

なりて、妻子も恨、顔も立かた、うめきを見たりき」とし、寛保二年の大水の際の救荒活動が、家の経営をかえりみない行動だったとして、後悔している。

仕官については、「仕官は勿論、公義並地頭所へ懸る家職、一向望むへからず…土民は賤し、いやしければ安し。士大夫は貴し、貴は危し」、また、「今の世をみるに諸侯より乱るゝ事はなかるへし。すゑの世になり、権現様御徳うするく事あらは、百姓よりみたるへし。さやうなる時、魁首とならぬやうに心かけ、はやくいかならん山林へも隠れ住、みつから耕作して、命を全すへし」と述べ、「仕官」を望まないように、「魁首」とならないようにと述べている。これは、明和の伝馬騒動などの経験を踏まえてのことだと考えられる。

ここで着目したいのは、「百姓」に対する友山の意識である。世の中が乱れる時は「百姓」から乱れると述べた後、山林に隠れ住んで、自ら耕作して命を全うするようにと述べている。友山は自らと「百姓」とを区別する一方で、「魁首」にならないように、つまり、百姓の上になれないように、と述べているのである。

## 2 天明五年の遺書

この八年後、友山は最後の遺書『荻氏遺書』を書き残している。天明五（一七八五）年に書かれたもので、分家の孫にあたる鉄次郎に宛てられたものである。『荻氏遺書』という表題は、胡粉で修正された後に、上から書き改められた形跡が残されており、果たして友山自身が付けたものかどうかは不明である。修正前の表題は「友山人生□□」となっている。また、荻氏とは、奥貫家の先祖の本姓荻野によると推定される。

ただし、友山は成島錦江が宝暦十三年に刊行した『経産事箋』<sup>(23)</sup>の跋文を書いており、この署名は「荻生友山」としていることから、荻生徂徠の「荻」の字を取ったと考えることもできる。しかし、遺書の中に徂徠学に対する批判や警鐘とも取れる記述が出てくることから、「荻氏」とは、奥貫家の祖先・荻野氏から取ったと考えることが自然だと考えた。

『荻氏遺書』の特徴として、欄外にびっしりと書き込みが残されていることも挙げられる。書き込みについて

は、本文とともに巻末の別表（後掲表③）に記した。この書き込みは、誰によるものだろうか。年代の特定できる唯一の書き込みとして、表紙裏の書名の一覧を見ることのできる。一覧は次の通りである。

瘍医大全（楊梅瘡方論一卷刊行） 経路發明 吉野道之記（松花堂書 千陰□）

桂川<sup>(24)</sup> 漫録 二卷 重堂飲中八歌仙併和文章刻行

敵倉浪寺活 芸文類聚 初学記 卓氏藻林 唐詩

□□ 胡元瑞寺敷

近刻書□

東遊記 西遊記（京師医、南溪千書、刊行、廿卷）

南溪漫筆 奉 漫遊文章（旭山書五卷清人註是張）

盛唐詩格 唐詩勉 唐詩紳 唐詩履 莊子因

老莊翼（十卷余） 常語敷 唐宋詩活 蒙求○○

類聚方便覽 白石経史世論（仮名文写本） 東奥紀

行（写本） 西域見聞録（三卷） 白石南鳥志（写本）

蝦夷隨筆（写本） 新井系団（白石先生写本） 写本

三王外記（白石著記 大樹写本）

憲廟実録（徂徠著写本）

柳宮秘鑑 蝦夷拾遺（写本） 翻譯名義集 義士伝異

本 □□紀聞（中川飛□守著）

この一覧の中の「近刻書□」と書かれた書名を追っていくと、一七九五年〜一八二〇年に刊行されている書物であることがわかる。友山が亡くなったのが天明七（一七八七）年であることを考えると、ほぼ十年後に刊行された書名が列記されていることになる。このことは、この遺書が子孫らに受容されたことを示しており、書き込みの仔細な分析を行うことで、その受容過程などにも迫ることができると考えられる。

次に内容に言及したい。学問については、「人は人の道をしらねはならぬ事也。人の道を知るには書物をよむへし。書物を讀には先手習をし。そよみをしまひて書物をよむ也」としたうえで、「十七八より農業をせねはならぬ也」「年十七八・二十はかりよりは家業をならはねはならぬ也」と述べ、あくまで家業を優先した上で学問を行うようにと述べている。徂徠学についても、「近世徂徠派の学、天下一同にはやり、詩文章を作る事を第一にする事となりぬ。儒者はそれかよし。平人はいらぬ事也。経

学の際かゝけてわろし。はやりにつて、うかくと日を送る内、年か寄手なんにもならぬばかおやちになる也。則友山其人也」、「徂徠先生と云人古書を見破り、唯めつらしき道理を付られし故、人おとろきもてはやし、其学流大にはやり候へとも、本来聖人の道には合ぬ事也。必しんかういへからず。たゝなくさみに見るへし」と言及し、徂徠学の流行にのつていた自身を「なんにもならぬばかおやち」として後悔し、徂徠学を「信仰」しないようにと戒めている。

また、「士」については、「士君子とて御士衆より上は、世を治め玉ふ大役□□。農工商の三は、其事いらぬ事なれ共、書物を見れば、おのつから皆手に入也。さるによつて、学問する人は、心もいやしからず、れきくにもおとらぬ故、わるくすれば、百姓かいやになり、興力同心の株を買出るやうになる。大にわろき事也」「縁くみなども、必ずすへからず。交もよからぬ事のみ多し。たゝ敬して遠さくへし」として、武士身分と同様の書物の知識を得ることで、農業が嫌になることがないように、また、武士との交わりは良くないことばかりだと述べ、遠くから敬つていけばよい、と述べている。

以上、四通の遺書や添え書きを軸として、友山の思想変遷を見ると、主に学問と仕官という視点を共通項としてその変化を見ることができると述べている。

学問については生涯、奨励する姿勢に変わりはないが、晩年の遺書では、「家業を第一にする」ように、と述べている。また、最晩年の遺書『荻氏遺書』では、徂徠学の受容に対して自らの反省を踏まえて「信仰しないように」と戒めているが、これは、友山が若い頃に家業よりも学問を優先してきたこと、それが結果として奥貫家に経済的困窮を生み出してしまったことへの反省を表しているのではない。

また、仕官については、元文二年の遺書では、子孫が「仕官の念」を持つことに対して抵抗がないのに対して、宝暦期以降の遺書では、官との付き合いは負担が多いので避けたほうが良い、という立場をとり、明和の伝馬騒動などを経て、官との交流は避けるべき、と述べるなど、大きな変化を見て取ることができる。

## おわりに

十八世紀に生きた村の知識人である奥貫友山の生涯を、その思想が端的に表われていると考えられる遺書を中心に検証してきた。

遺書を分析する際のキーワードとしたのは、学問と仕官である。

三十歳のときに残した遺書の中には「仕官」という文言を見て取ることができるが、このことは、少なくともこの時期までは友山の中に仕官に対する意識があつたということを示しており、学問に関しても仕官を意識したものであつたと見ることができる。しかし、晩年の友山は仕官することを全面的に禁止している。加えて、学問は「家業」「農業」を優先した上で行うべきであるとし、学問以上に「五倫」を始めとした道徳を優先している。「家業」を第一にするようにとした上での学問は「孝経・四書・小学・近思録の示蒙句解にて、学問をしまいで、家業にかかるへし。…さなくては、人の道はしれぬ也。人の道をしらぬは、残念なる事とおもふへし」と書

かれている通り、「人の道」を知るためのもの、「家業」のための学問であつた。ここに友山の学問観の変遷を見ることができるといえる。

最終的に学問より優先されるべき事柄とされる道徳観に関しては、友山は晩年『子孫江申置ことは』や『荻氏遺書』の中で「五倫」「人倫の道」を重視し、学問はそれを行うためのものであるとしている。宝暦期の遺書では学問を第一とされていることから、学問よりも家業を重視するようになるのは明和以降の時期であると考えられる。この時期は、明和の騒動による処罰などに直面した時期であり、これが契機となつていると考えられる。

友山の意識、思想を遺書から追つていくと、「百姓」に対する独特の意識を見ることができる。自らも農民であるにも関わらず、「公事立たる事に頭取になるへからず。ことに百姓は、義のなき者なれば、公事□あしくなると皆変へる也」として、百姓とは「義のなき者」であるとする不信感を述べている。同様の記述は『救荒余話』の中にも見ることができるといえる。

つまり、友山は仕官をしないよう、「魁首」にもならないよう戒める一方で、百姓は義のない者と位置づけ、

自らと差別化をはかっている。遺書をみる限り、友山は自身の身分について明確に言及していない。百姓でも「魁首」でもないとする、友山はどこに自身のアイデンティティを持っていたのだろうか。ここに、「中間層」である在村知識人としての友山の苦悩や葛藤を見ることができるとはならないだろうか。とりわけ明和の伝馬騷動後の二通の遺書からは、動揺していく幕藩体制の中で「上」からの重圧と、変容する地域社会の「下」からの突き上げの間で、その矛盾に苦悩する友山の姿を見ることができるのである。

友山は前述したように、明和期に奥貫塾を開塾し村の子弟教育に注力した。苦悩と葛藤の末に、新たに教育の活動に歩みをすすめたことになる。友山が教育にどのような意義を認めたのか、教育の実践者としての友山の歴史的意義を今後明らかにしていかなければならない。塾の教育状況は、現在のところ史料上明らかではないが、奥貫家に千三百冊以上残されている蔵書などを手がかりとして、今後追究していきたいと考えている。

蔵書については、第三、第四の遺書に多く出てくる書物の多くが、奥貫家文書の中に現存している。蔵書の一

つひとつを手にとつて、書き込み等を調査し、友山がその書物から何を学んだのか、明らかにしていく基礎的作業を行わなければならない。『荻氏遺書』に見られる大量の書き込みの分析も不可欠である。

一八世紀を生きた友山が抱えこまざるを得なかつた悩みや葛藤は、おそらく友山一人のものではない。本稿の冒頭でも述べた田中丘隅や細井平洲の名前を挙げるまでもなく、友山の悩みや葛藤は、時代・社会のありように起因するものであろう。友山と関係のあつた知識人たちとの交流の実態を解明する作業も行う必要がある。いずれも今後の課題としたい。

#### 【注】

- (1) 山田忠雄・松本四郎編『宝暦・天明期の政治と社会』一九八八年 有斐閣
- (2) 友山については、『川越市史』『埼玉県史』における記載に加え、岸伝平「奥貫友山」（埼玉県立文化会館編『埼玉県人物誌』上巻）一九六一年、佐藤繁『奥貫友山』一九七九年の二つの研究の中で、儒学者、慈善家として取り上げられている。

(3) 白井哲哉「十八世紀村役人の行動と『中間』的意識―武

蔵国川越藩領の名主奥貫友山を中心に―」（『近世地域史  
フォーラム3 地域社会とリーダーたち』二〇〇六年吉  
川弘文館）

(4) 根岸章子「明和の伝馬騒動における村役人の動向―武蔵  
国入間郡奥貫家の事例を通して」（『史艸』第四五号、二  
〇〇四年）

(5) 奥貫家文書（埼玉県立文書館所蔵）

(6) 川村肇『在村知識人の儒学』思文閣出版 一九九六年

(7) 杉仁『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流  
―』吉川弘文館 二〇〇一年

(8) 藤田篤訳『譯註 先哲叢談』金港堂 明治四十四年

(9) 前掲 白井「十八世紀村役人の行動と「中間」的意識」

(10) 奥貫家文書 No. 五四六

(11) 奥貫家文書 No. 二五 三十一―

(12) 読書重視については、錦江著『処世往来』（筑波大学付  
属図書館乙竹文庫所蔵）にも見ることができ。

(13) 奥貫家文書 No. 四〇

(14) 奥貫家文書 No. 三六

(15) 奥貫家文書 No. 三五

(16) 奥貫家文書 No. 二三

(17) 奥貫家で管理されている。

(18) 埼玉県教育委員会『金石文集下』埼玉県立図書館 一九

六八年

(19) 友山の妹か。友山の三人の妹に関しては、奥貫家霊簿等  
を見ても名前が不明であることや、嫁ぎ先が明確でない  
ものもいることから、その可能性も否定できない。

(20) 奥貫家文書 No. 四二「奥貫家霊簿」から、その嫁ぎ先を  
知ることができる。

(21) 奥貫家文書四四―一、四四―二

(22) 奥貫家文書 No. 三八

(23) 東北大学附属図書館所蔵

(24) 「川」は「林」を消した後に修正されている。

表③ 『荻氏遺書』とその書込み

番号	『荻氏遺書』	記号	書込み	書名(人名)
0	人は人の道をしらねはならぬ事也。人の道を知るには書物をよむへし。書物を讀には先手習をし。そよみをしまひて書物をよむ也。			
1	■手習について。 てほんは御家流、首藤流、馬場流のやうなる…かならずへからようを習へからす。 扱(扣?)手かみ、証文、願書、大たいにかゝれるならば手習をやむへし。十七八より農業をせねはならぬ也。手習始る事は八つ九つよりはしむへし。	a	○雨芳洲曰、宋王曾父敬重字紙、明王華亦敬重字紙雨家各有名子、以為敬重字紙之報、王華有人種事不知て於何書、凡字之書雄紙上者謂之字紙我所謂反古也、又有以書詩之紙為字紙者云云	(雨森芳洲)
		b	○雨芳洲曰、年少致学者能如実超之用心則十年工夫可以為城内之雄矣蓋每日作詩一首每月做文三篇誦書除四書五經外一日誦、口卷積至十年當得詩三千六百首文三百六十篇書一千八百卷如是而学不成緒言未之有也	
		c	○陳留謝氏曰、凡百拔芸書上矣ト座次之、暮搦問心、為人役	(陳留謝氏)
2	■そよみについて。 そよみは手習の間間にならふへし。先孝経をよみ四書五経をよむへし。しらうとのそよみは。それによめ共文選をよまねは書物かしゆうによまれぬから。とうそ文選をよむへし言壽老宗五郎におさはるへし。又は禪宗などにはよむ衆有物也。たよりに習へし。文選は大なる物なれば、わすれそうな所へはかなをつけ置へし。しりそいでいくたいひもふくすへし。年十七八・二十はかりよりは家業をならねはならぬ也。	d	○語、行有余力則以学文口楽計亡ヒテ今礼記中ニ少シ残レリ	
3	■読書 書物をよむには先孝経の諺解の註にてよむへし。三度もくりかへしよめは、大たいしれる也。しれぬ所は人にも聞へし。しれぬ所は打すておくへし。書物数を見れば、皆しれる也。なつむへからす。其次には四書を示蒙句解にてよむへし。それから小学示蒙句解、近思録示蒙句解を見るへし。それ切にて人の道皆しれる也。百姓町人はそれ迄にて学文やむるよし。其上にも隙あらは四書の蒙引をよむへし。又又よし。其上にも隙あらは五経の詩経書経をよむへし。此註本家に五経大全あれとも、唐本なればよめまし。五経集註といふ物有。てんつきにてよみよし。五十冊有。一兩二三分なればととうが買てくれすは、はなして売から、詩経集註はかり買へし。一分はかり也。書経も其とをり也。易の大全手前にあり三書を點付にて見れば、跡は唐本にてよめる也。本家の大全を見るへし。此通を朱子学といひて、宋朝の諸君子の註也。今の朱子学をするは笑也。大にりようけんちかひ也。用へからす。かみにいふとおりにて、人の道かもんは皆済なり。四書五経人の道こりなく聖人仰られおき給ひぬれとも、所所出でしれる也。小学には父子の道は一所にあつめ、君臣の道は君臣の所へあつめし玉へる故、五倫の道一日によみ仕廻なり。人の道をしるしたる書小学より能はなし。上にいふ通。人は人の道をしらねはならぬ事なれば、先急用なる書物なれば、年二十より前にとくとへむへし。	e	○志尹云、読書講義小学ヲモテ初トスヘシ次ニ四書・家礼・金思録 ○貝原益軒翁ノ童子訓見ルヘシ	(志尹) 「小学」「四書」「家礼」「金思録」 (貝原益軒)
		f	○四書五経ヨリ史漢ニイタルトコロニハ唐明の詩集・蒙求・文選等ノ他小説ノ書ヲ読ムヘシ又カタワラ通鑑綱目ヲ読テ歴代ノコトヲウカカフヘシ	「四書五経」「史漢」「蒙求」「文選」「通鑑綱目」
		g	○和書ウタモノカタリ貝原述作ノ諸書尤モヨムヘシ	(貝原益軒)
		h	○人ノ外ニ道ナク道ノ外ニ人ナシト今日ノ人事ハ則チ今日ノ道ナリ。ソノ暇ヲ以テ学ヒ学ンテマタ人事ヲ治ム他ナシコレ聞ナリ。何ゾ事シゲキヲ以テ患トセンヤ	
		i	○仁齋伊藤先生云兼取傍搜求口番諸家之書捨其短而取其長則是非相形彼此相濟口索既久而後有一至正至当之理自在其中非徒可免終身之害而天下之書皆摩非我師矣	(伊藤仁齋)
		j	○詩文章ヲ作り不生高尚ニ論議シ他ヲソシリ我ヲ其場ニ居ル学者アリ。是人ヲソコナヒ我ヲアサムキ損アツテ更ニ益ナシ	
		k	○書籍古ハ竹ヲアブリテ青い色ヲ去リ漆ニテ字ヲカキツケ革ニテアミタル也。今ノスダレノ如キ物ナリ。是ニヨリテ書ヲ殺青トモ云。青色ヲサルト云儀也。漢ノ世ニ至テ紙ヲ作り出シ軸ヲ付テ巻物ニナシテ用ユ巻カヘス度ニ紙口ルハトテ唐ノ世ニナリテ今ノ冊子トナリタル也	
l	○雨芳洲曰凡誦書者視聖賢之言口有喜悅恐怖自省自警之心庶乎可以成君子之学矣茫然而誦如口超人之說超則難或摻案手卷終日暗吟竟於無成焉耳況摻末必案手末必卷者乎		(雨森芳洲)	



4	<p>■五倫 五倫といふか人の道也。人の道を五しなに分ておしへ玉ふ也。…かく聞ては書物見にも不及、口口口ないやうにれ共、書物にて其の理をどとのみまわは、うわの空にて身にしみこまぬから、一生うかくとくらして、不孝不忠をして、身を悪に落し入、身を亡しまふ也。土君子とて御士衆より上は、世を治め玉ふ大役口口口。農工商の三は、其事いらぬ事なれ共、書物を見れば、おのつから皆手に入也。さるによつて、学問する人は、心もいやしからず、れきくにもおとらぬ故、わるくすれば、百姓かいやになり、興力同心の株を賣出るやうになる。大にわるき事也。見た口口口けれども、兼好法師のつれづれ草に、其家ならずは武家をは好へからずと、書しるし玉へり。縁くみなども、必ずすへからず。交もよからぬ事のみ多し。たゞ敬して遠くへし、これは学問にはいらぬ事なれともちなみに言及しぬる也。</p>	m	<p>○香太仲口言曰、聖賢千言萬語皆以修身為本其身不修何邊他 (香太仲口言)</p>	
5	<p>■古学 古学は事学とて、なす事をよく勤れば心自らおさまる故、第一に行ひなす事をおし口口口。古の聖人の道也。行ひとは、たとへは、孝行をするには、先食事を調へるには、少しも味よくまくるやうにする也。貧なる者は、貧とうおうにとくへる也。富貴なるならば、なをよくしてまいらする也。親のいひつくる事は、あいくといひて、はやく其事をする也。立ふるまいや、夜口の事、親のおほしめすやうにする也。かくの如くなれば、心おのつから大孝心になる也。よつて事業を第一に教口の口。</p>	t	<p>○十三経、孝経、論語、孟子、毛詩、尚書、周易、春秋、左傳、公羊傳、穀梁傳、周禮、儀禮禮記、爾雅、この中論語は何晏の註なり。孟子は趙岐の註、詩経は毛萇と云人傳を作りけり故に毛傳と云、易は樂易とて陰陽五行の樂化する道理を記たる書也。春秋は魯國の日次帳の名なり。然るを孔子是を削り正し書き改め給ひて春秋と云。左傳と云、孝経とは孔子の弟子曾子、孝行の道を孔子に問ふことを記す。</p> <p>○孔子の道は古の聖人舜堯より文王、武王、周公迄の道を述べられたもの故萬時の口短になる也。</p> <p>○朱学(先程二子)陽明学・古学・山崎派・熊澤派・伊藤派・徂徠派</p> <p>○漢魏晋等の注を古注と云、孔安國、董中舒・鄭玄、趙岐何晏の等の傳也。新注、朱程、張子、趙宋之人、初の宋をば劉宋と云。</p> <p>○漢の孔安國尚書を註す。魏の何晏は論語、晋の郭璞は爾雅。</p> <p>○山崎派は常に明德を明にし致知格物を心掛る也やはり程朱の学なり</p>	<p>「十三経」「孝経」「論語」「毛詩」「尚書」「周易」「春秋」「左傳」「公羊傳」「穀梁傳」「周禮」「儀禮禮記」「爾雅」(何晏の註)「孟子」(趙岐の註)</p>
6	<p>■新学 新学といふは、聖人の御時よりはるか末世に諸君子立れし道也。理学と云也。心かけければ行は自よくなるといふ事にて、心をみかくをし口口也。古学は学者ならては、しとけるる物にあらす。学問のしかたしらべなる物也。朱子学は平人もなるやうにおもふ也。夫故朱子学を施すといふ事なれども、朱子学を片付、其上にも身上も口かねぬぬやうに、且又其身のひまも有らば古学の方をもなるたけに見るへし。口口口口口のしかたを書おく也。古学は十三経也。本家に有。かりて見るへし。唐本なればよく読兼へし。和本にて詩経書経などを第一によも始へし。和本は、道案老玄寿老西沢氏有。かりて見へし。和本にてへん見れば、唐本よめる也。本家のを見るへし。古学の書を見れば、朱学の書も又よきさはける也。それも論語・孝経・詩経・書経などよみたらははやむへし。聖人の道のこる所なし。めつたに傳く見れば、家業おろそかになり口口からす。一身上かよくなるは、始にいう通、孝経・四書・小学・近思録の示蒙句解にて、学問をしまして、家業にかかると。何とそく身上はわるしとも、右の口品をは見るへし。さなくては、人の道はしれぬ也。人の道をしらぬは、残念なる事とおもふへし。</p>	v	<p>○西土歴代事其れ堯より前は代の名さたかならず。帝堯の時を唐の世と云。堯天下を舜に譲りたまふ。舜の世を虞と云。(略)</p>	<p>(雨森芳洲)</p>
		w	<p>○人常に若きことなし。賢へず老境に入るなればひとしほに学問の一時こそあらほしけれ葡居のとき友を待す老ひ去て樂あまりあり。</p>	<p>(伊藤仁齋)</p>
		x	<p>○仁齋童子問曰、問天下之善如何為最日好學為最類敏次之材幹又次之</p>	

7	<p>■史学 史学といふは唐の世の始より百年はかり以前迄の事をするしたる書物也。一通にしろしたるは、温公資治通鑑二百卷程有。又朱子綱目通鑑百七冊本家に有。温公資治通鑑は、所にて三十冊開本也。見るならば朱子綱目を見るべし。大部なれば、ちよつと見らる物でなし。十八史略七冊は口口に有。見るべし。一とをりはやくしてよき也。</p>	y	○史記、漢書、通鑑綱目、国語、国策、後漢書、三国志以下の全史を見るべし	「史記」「漢書」「通鑑綱目」「国語」「国策」「後漢書」「三国志」
		z	○本邦の国史律令格式等みな読べし。国人にして国典を知らざるべからず	「国史律令格式」
8	<p>■二十一史 二十一史とて大部物有。是は本家にもなし。其内史記漢書・梁書・晋書・本家に有。是はからの一代く治口をしろし、一人くのはたらきをしろしたる物也。史記は、世間で皆見る物也。さつと見てよし。</p>	a	○廉洛口口之書は無論歴代名儒の家集語録隨筆華記活眼をもて看るべし	
		b	○句構文中子は儒家の傍流、管晏は功利の説、老莊列墨は異端、諸子は暇少き人は読むべからず	
9	<p>■古人の行い 古人の行ひをしろしたるを見るならば、蒙求かよし。手前に有。まよへし。史記・蒙求・十八史略・平神のがには夫ばかりにてよし。</p>	c	○唐の世に書を四部に分ち、庫を四つ作り書を蔵む。第一の庫を經と云、經書の類十一種を蔵む。第二の庫を史と云、歴史官職地理類の書十二種を蔵む。第三の庫を子と云子類なり。諸子天文曆書算法兵書口書など十七種の書を蔵む	
			<p>○諸子五品に分る荀子楊子は儒家、管子準南子は雜家、老子莊子は道家、韓非子は法家、呉子孫子は兵家、第四の庫を集と云文集の事也。</p> <p>○十九子全書、二十九子品彙、諸子彙編、唐の時第四の庫に屈原宋玉司馬相如の文七百三十六家を蔵む</p> <p>○楚口葡待中集、陳記集稽古散文集選漢魏百口名家漢魏六朝文集</p>	
10	<p>■徂徠学 近世徂徠派の学、天下一同にはやり、詩文章を作る事を第一にする事となりぬ。儒者はそれかよし。平人はいらぬ事也。終学の隙かゝてわろし。はやりにて、うかくと日を送る内、年か寄手なんにもならぬばかおやちになる也。則友山其人也。史記左傳にはかり懸りうかうか年寄て經書をよまず、後悔千萬也。我こりし所を云ふなり。かならず詩文章つくらんとすべからず…詩文章を好作れるは南郭、金華數人のみ也。またしき詩を作、赤印をおして人中へ出したる、笑止千萬也。当今の人情人の詩歌を見て、其心にかんする事はせず、わるひ所を見出して笑ひのしるのみ也。</p>	d	○古文口学宜熱読書初十三經次十三家 左氏左傳國語國策老莊列呂氏春秋準南子屈原宋玉荀子司馬遷班固文選釋小右衛門京師人江戸に住す 金華平野氏名玄沖字子和稗源右衛門奥州人共徂徠門人	(服部南郭) (平野金華) (司馬遷)
11	<p>■詩文章 詩文章作ることは無用にして古人の詩を見て心の樂とする事はよろし。唐詩訓解陶淵明全集白楽天の詩文を見るべし。手前に有。白楽天の詩を古学の人甚いやしむる也。それにはかまふべからず。かんせいなる事の有は白氏文集也。古文前集皆古詩にてかんせい也。後集の諳解手前に有。見るべし。古人の詩文集を見れば心か和き理か融してよろし。月花を見ても心にしみ、心か上段になり、野卑ならずして一生のしみに有。人の前に先てくせるべからず。併心の合たる人とは口にはなし合たるもよろし。今時はやり物、唐詩選左傳をよみ日にくらすべからず。唯經書を見へし。左傳も經書の傳なれども譯有りと覽譯をいひ置也。</p>	e	○南郭曰鄭玄か禮註杜氏か左傳註、郭象莊子註劉孝標世説註など一種の奇文なり	(服部南郭)
		f	○雨芳洲橋窓茶話曰、凡詩出於天才者天然有自然之意誦之口神怡躍然不能自己、若夫安排口擬而後得者(中略)	(雨森芳洲) 「橋窓茶話」
		g	○同日古今以杜詩為第一、其氣象雄渾句中有力、而行餘不失言外之意者以諸名家詩比見然後可知矣	
		h	○唐詩ニヨリ多く古人ノ詩ヲ讀テ作ラハ一家ノ格立ヘシ。文辭ハ己カ意ヲ達スル者ト心得テ学フシ。其法ハ唐宋ノ大家ニ取り多く古書ヲ讀ミテ助トスヘシ	
		i	○江戸の竹堂篠本先生は博学而能文章詩。文章規範を註共に暗誦し文を不殘字を寫に始より書く。古詩は六朝は陶靖節一人のみなり初唐の五言盛唐の歌行みな後学の規範なり。公字行、帝京篇等を擬すべし。豪華は厭ふべし。五七言律絶は全唐の詩を混じて讀むべし。混雜の趣を失はぬ様に作るべし。文は西漢以上を盛なりとす務て古書を讀むべし。又韓柳に依る務て唐宋大家の文を熟読すべきなり。分は韓柳諷蘇に止ることは千載の定論なり。詩も一概に宋元を棄つべからず、宋元自ら宋元の長所あり	(篠本竹堂)
		j	○詩を作るは學者の餘事文章は學者の任にて分内の事なり	
12	<p>其方事は骨よきにて、作がならずは、目傳の書を買あつめ、とくと見、其上にて、一通り目医者の弟子となり、聞口口口くなる事也。</p>	k	○周南曰古より猛將勇士歌を讀詩を作り文雅の心なき人鄙野無骨にて武徳も全からず	(周南)

13	<p>■ 荻生徂徠 徂徠先生と云人古書を見破り、唯めつらしき道理を付られし故、人おとろきもはやし、其学流大にはやり候へども、本来聖人の道には合め事也。必しんかういへからす。たなくさみに見るへし。手前に本有。辨道、辨名、中庸解、大学解也。</p>	l' m'	<p>○徂徠翁の了簡は古文辞を読んで古の道を知る事。是手前の手で古の人へのやうに文章をかか事ならねは、古人の文はとくと済ぬ故弟君子共に詩文章を第一にさせられた者なり。</p>	(荻生徂徠)
14	<p>■ 日常の留意 人は命長くなくては何事もならず。食傷せぬやうにすへし。…大山参り、富士参りもかならず無用。忽して旅は危き事多し。無用也。 農業もはやく出て、あつならぬ内にかへり、ハツさかりには出て、涼しきうちすへし。 万一よりはり候事も有へけれど、世の中は七ころひ八おきなれば気を落さすにはけむへし。 短気あるへからす。一時も身を破るは、短気なり、慎へし。</p>	n' o' p' q'	<p>○橋窓茶話日間茂菟脚日余故人也。傳覽文章域内無比第於六網上有差心賈廉焉。</p> <p>○巴陵口口日学問の利益の事多く昔の人云た事や行ひを看れば其内に能く國をさめた人もあり忠臣もあり孝行な人もあり鈍人もあり発明な人もあり面白いことをかしい事もあり幽霊の出たこともありどこの國にはこんな事があつたと、遠い國や幾千百年の昔を知る事故、能く読めてくと狂言を看るよりは遥に面白い事じやぞ又昔の戦場で詩を作り歌を読たはいつの間に稽古した事じやぞ皆好きなればはやと見えたり。</p> <p>○仁齋先生朱子程子の悪い所を初て見出した人で器量すくれし人なり。されとも孟子を信せられし故全体宋儒の趣を離れず</p> <p>○徒然草日獨ともし火のもとにふみをひろけて見ぬ世の人を友とするこそ、こよなうなくさむきなれふみは文選のあはれるまき白氏文集老子のことは華南の妾この国の博士ともかけるもいしへのはあはれる事おほかり</p>	(雨森芳洲) 「橋窓茶話」  (巴陵口口)  (伊藤仁齋)  「徒然草」
15	<p>■ 余談 ①人は第一短気を慎むへし。我は座上の取合にて何心なく悪口に及へども、向方気せまり、身を川へ投、くひれ死せし事またり九人聞及たり。其内子父を悪口、父おもひ詰、身を亡したる者二人、よめ姑を悪口、姑死たる者、下南島名主傳右衛門、父しかり過し子くひれ死たり。遊馬むら名主兄よめ、弟を耳こすり云て、弟くひれ死す。丹木り天明四年飢渴の春足立さち川村にて貧人母妻子五人を養ひ兼当人に麦五升かり度旨申せしに、前前にかし物有に、又云といひて悪口し、むなくかへせし也。貧人口惜くおもひくひれ死せし也。向方おもひ詰たる妾也。口災か恐しとて物いはずにもならぬ物なれば、短気をしつめて、詞和に正道に云へし。夫にて向方妾になる口口口口物也。 ②公事立たる事に頭取になるへからす。口口口口せられて頭取になる事有物也。ことに百姓は、義のなき物なれば、公事口あしくなると皆変へる也。 ③類になるへき者は背き、思ひの外なる人、身方となる。常に此事をおもひて、一旦我に背し人をもはぢくと云こむへからす。小口なる事は遠慮なく云へし。 ④詩歌は、一生を盡してもよく出来ぬ物也。なましいなる詩歌人中へ出したるはわらひ草口人品却てかろくなる也。隙ついやす也。学へからす。慰に基せうきはよし、上るり三味線急度禁すへし。 ⑤家内常に御薬類の薬、氣付、とくけしたしなむへし。急なる時は医者も間に合ぬ也。 ⑥公儀の御法度かた相す。意趣有者ににらみ居られては、一生きうくつなり。彼者訴出す共、人中にてきめ付られ候。 ⑦世上一統に女善光寺参るることとはばかることなし。脇道する時に、己は事出かさぬやうに慎でも、外より変出来るか、病死するか、内済しかたき事有て、其所にて訴出て、忍旅の事露見する事も有へし。先年柳の宿にて、佐渡の土金一箱紛失、とまり合たる旅人、本国へわたり、御吟味有事有之、冬故善光寺参詣無之仕合也。如此外より変出来る事有、よしや左様の難なく帰たり共、村中へ対し、一生あたまは上らぬ也。無據事あらは御判をいたさ遣すへし。御判を番所へ首尾能上口口口口ではならぬ口口口口遣也。口口口口善光寺参詣無用也。又よく考見よ。親か夫か子の首の飛事なんともおもはすして行悪人を、如來よくおほしめすへきや。 ⑧殺生すへからす。生たる物をはらさき、背をわり、又はくしにつらぬぎ、焼あふり、煮殺し、浅ましき有様也。天地は生(ママ)を心し給へは、天地の心にそむく故に、しせんと不仕合ひたりまへになり、貧しく成そかし。いかに小身にても、下直なるしびまぐろ・くじら・いはし・このしろ・ごまめ・干物を買喰へし。川魚もやき餅の類、煮る人の所に仕上たるはくるしからす。自分にて手かけせるやうにすへし。かつをふし、甚性よき物也。子ひはかつをふしにて鮎などもよし。折折魚を喰はされは、臍胃の養あしき故、用へし。 ⑨飼鳥すへからす。いつを限ともしらす、籠の中になかなさ、おもひやるへし。心有人の見ん事もはつかし。 ⑩庭木も枝をたわめ、木末を切作る事よろしからす。唯根へ口口口口寄下こい口口口口養ひ、立柴やうにすへし。天地の心に口口口口也。 ⑪井戸のかこひすへし。口口口口高うするとなりとも、井けたなればなよし。かこいなき井戸へ、子供落て二人死たり。常に蛇むかて落る事有。前河内の隠宅の井に、いたち落て死たり。きたなくて大難儀したり。下屋敷の栗一本切は、そうさもなく出来る也。我心にかかる也。いそき作るへし。 ⑫毒にあたらぬやうに用心すへし。 胡椒に木瓜。胡椒すへり苞。和中散に胡椒、すへて木瓜は菓種にてき業多し。丸菓散薬用たる前後遠慮すへし。安中丸にもさし合有也。ほうそうに柚子、柚子に餅、そは切に黒砂糖、醜にこそう、さいにさんせう、酢にうなき、別して梅酢かわらし。うなきかはやきに梅干用。しきみの実大毒、所所にて子供死たり。</p>			